

普及項目	養殖
漁業種類等	養殖業
対象魚類	シカメガキ
対象海域	八代海

県南地区におけるクマモト・オイスター養殖指導及び飼育試験について

県南広域本部水産課・上原 大知

【背景・目的・目標（指標）】

クマモト・オイスター（シカメガキ）については、夏場の高水温期における大量死が課題となっていたが、温湯処理技術（貝を40℃のお湯に1時間浸漬）が開発されたことにより、県内では越夏養殖が可能となってきた。

しかし、芦北町地先では、温湯処理を導入し生残率の向上を図ったものの、昨年度は5月下旬から7月にかけて大量死が発生した。そこで、海況に適した新たな養殖方法の探索を目的に、今年度は温湯処理の有効性を再確認するとともに、干潟飼育の有効性についても確認した。

【普及の内容・特徴】

1 温湯処理の有効性の確認

温湯処理の有効性を再確認するために、一定間隔（隔週の頻度）での温湯処理の徹底を指導した。

2 干潟飼育の有効性の確認

シカメガキの本来の生息地は干潟域であることや、他地区において干出飼育による高生残性が報告されていることから、芦北町地先干潟におけるバスケットを用いた干出飼育の有効性について、令和5年度（2023年度）に引き続き、生産者と実証試験を実施した（図2）。

【成果・活用】

1 温湯処理の一定間隔の厳守

沖合筏に垂下したクマモト・オイスターについて、令和6年（2024年）5月1日から3週間間隔で温湯処理の徹底を指導したが、6月中旬から7月にかけて大量死が発生した（図3）。令和5年度（2023年度）と同時期の大量死の発生であったことから、芦北町地先においては、温湯処理だけではへい死を抑えることは困難と推測された。

2 干潟飼育の有効性の確認

従来の沖合筏での垂下式養殖と比較して、6月までの生残率が向上したが、6月から7月にかけて大量死が発生した（図4）。しかしながら、干潟飼育は沖合筏での飼育に比べて、飼育カゴや貝の汚れが少なく（図5）、身入りが良好になる時期が早いことが明らかとなった。

なお、今年度に他地区で行われた試験では、より干出時間が長い環境で生残率が高かったという報告があるため、今後は試験条件の改良を行い、再度、干出飼育の

有効性を確認していく必要がある。

【達成度自己評価】

4 目標（指標）はほぼ達成できた（76～100%）



図1 位置図



図2 干潟飼育の様子

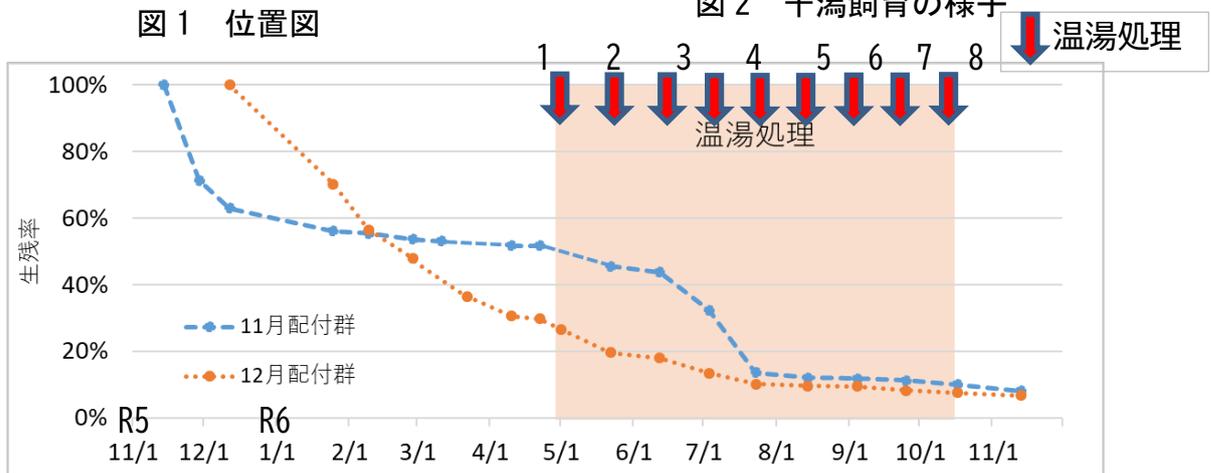


図3 沖合筏飼育と温湯処理による生残率の推移

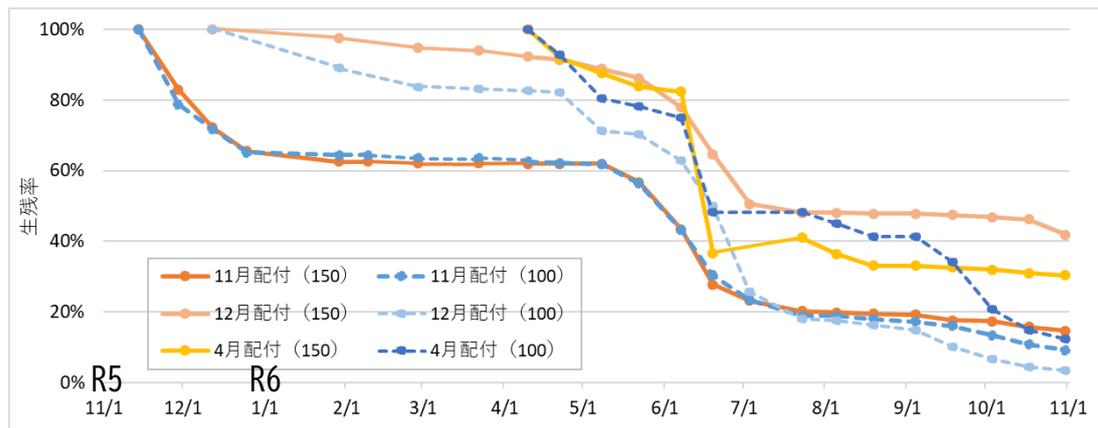


図4 干潟飼育による生残率の推移（凡例の括弧内は垂下高さ（cm））



図5 沖合筏飼育の貝（左）と干潟飼育の貝（右）